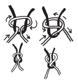
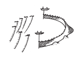
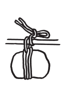
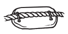
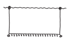
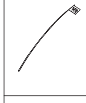
漁撈用具

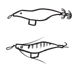
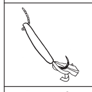
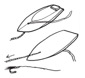
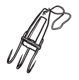
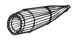
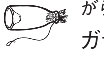
神野善治

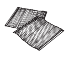
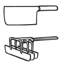
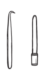
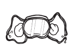
網漁具

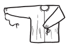
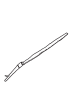
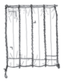
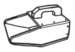
名称	説明	只見	奥三面	羽村	沼津	徳山	滋賀	鹿児島	沖縄	さまざまな呼称	備考
 あみじ 網地	一本の糸で順番に一定の寸法で結び目をつくりながら平面を構成したもの。主に魚類の捕獲用の漁網や袋状の容器などを構成する基本的な素材となる。結び目は数ミリの細かい目から、数mに及ぶ巨大な目まであるが、網目の結び方には２種類の基本形があり、主に本目と蛙股と呼ばれる。前者が曳網類などに一般的な網目で、後者は刺網類やたも網などに用いられている。網目の寸法・掛数（１単位の幅に相当する目数）・まわり（網地の長さに相当する段数）で規模を示すことができる。素材としては藁や麻、木綿などの植物繊維や絹糸などから、釺金、化学繊維に発展した。網地を網類に結節するときのたるみの付け方や、三角形など変形の網地を組み合わせて立体的な漁網が構成される。図は漁網の基本的網目（左ホンメ、右カエル股）。				アミ、アミジ		アミ	アミ	アミ	【網】あん・いなみ・さで　以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一）	
ぎょもう 漁網	水中の魚類などを捕獲するための基本的な漁撈用具。さまざまな寸法の網目をもつ網地を立体的に裁ち合わせ、浮き（浮子）や錘（沈子）、曳縄類などを取りつけて構成される。種類は形態や漁法により多様だが、代表的なものに、刺網、曳網（地曳網・船曳網など）、すくい網（棒受網・四手網・さで網・たも網など）、旋網、追込網、定置網などがある。			アミ	アミ		アミ	アミ			
じびきあみ 地曳網	網漁具を代表する曳網（引網）の一種。曳網は、ひとつの袋状の魚捕部と、その両翼に細長い平らな網を付けた「一袋両翼」の形式で構成され、さらに両側に曳縄をつける。これを船で曳き廻して魚類を取り囲み、浜に引きあげて主に人力で曳いて、袋に入った魚類を捕える。浮子・沈子・手木・浮橡などの部品がある。魚種により網目や素材の異なった網地を組み合わせて全体が構成される。				オオアミ、ジビキ、ジビキアミ		ジビキアミ	ジビキ、アミ、カズラコキ	×	【磯近くの海で引く網】すまびきあみ・てぐり・てぐりあみ・てんぐり・てんぐりあみ　以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【地引網】こっくり　以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）	
こしひき 腰引き	地曳網を浜で引くときの補助具。板片の中央に穴をあけ縄を通したもので、この板片を引綱に絡め、反対側を腰に付けて体重をかけて曳く。						クサリ、コシローフ	ウチグリ			
ふなびきあみ 船曳網	網漁具を代表する曳網（引き網）の一種。曳網は、ひとつの袋状の魚捕部と、その両翼に細長い平らな網を付けた「一袋両翼」の形式で構成され、さらに両側に曳縄をつける。これを船で曳いて魚類を取り囲み、船上に引きあげて魚類を捕える。浮木・沈子・手木・浮橡などの部品がある。魚種により網目や網地の寸法、構成が異なる。				フナビキアミ、シラスアミ		チュウビキアミ、イサザアミ、エビヒキアミ、コイヒキアミ				
 おいこみあみ 追込網	網漁具の一種。磯などの岩間にひそんでいるイサキなどの魚類を脅し具などを使って追い出し、特定の場所に予め仕掛けておいた敷き網類などの袋網に誘導して捕える漁法で、沖縄糸満の漁師たちによるアギャー（揚げ網）と呼ばれる網がよく知られ、彼らの進出によって各地に同系の漁法と漁具が伝えられている。付属具としてブリキなどと呼ばれる威嚇具がある。				アゲアミ						
うおおどし 魚威し	磯の岩の間などに隠れている魚類などを追い出したり、魚群を誘導するための道具。縄に魚が嫌う鵜の羽根をつけたり、ヒラヒラ動く板などを吹き流し状にたくさん付けたり、はたきのように棒の先に付けたりする。沖縄糸満の追込網用のスルシカー、内水面などで用いる鵜縄・カズラナカワ（葛縄）などがこれに相当する。蛸捕りの脅し棒などもこの仲間ということもできる。	キネオドシ			ブリキ、クスグリボウ		ガバン、ウ、オイバネ	ウナウ、ブリ、アバ、オドシ		【魚威し】ブリキ・スルシカー・ウナワ・カズラナワ　以上、神野善治	
さしあみ 刺網	網漁具の一種で、平らで細長い網地を基本にし、その上端に浮子、下端に沈子をつけて水中に垣根のように立ち上がるように沈め、魚や蝦蟹などの獲物がこの網地の目にささったり、からまって捕獲される。サザエなどの貝類にもこの網が用いられている。				ササリアミ、コザラシアミ、サンマアミ		サシアミ、コイトアミ	タテアミ			
さであみ 叉手網	すくい捕る方式の網漁具。２本の棒（棹）の手元を重ね、先方を開いて、その三角形の部分にたるみのある網地や袋状の網地を縛りつけたもの。これで獲物をすくって捕える。➡先端部分に枠が付く網は「たも網」として区別しておく。	サデアミ	エナミ		サデ	シャデ、ホオリ	サデアミ、シャデ	サデアミ、サデー、サデ	サディ、ヤンダー		
たもあみ たも網	すくい捕る方式の網漁具。柄の先に円形あるいは方形・三角形などの枠をつけ袋状の網の口を結びつける。小型のたも網は、他の漁法で捕獲された魚介を船などにすくい上げるための補助的な役目で使われることが多い。➡２本の柄の先端がひらくものをここでは、叉手網として区別しておきたい。		タモ	サデ	タモ、タマ	アユカケタモ、ホオリ、ニゴリズキ	タモ、タマ	タモ、タビ、スクイアミ	タム		

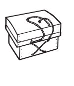
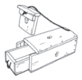
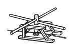
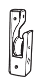
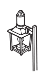
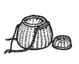
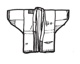
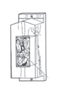
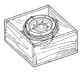
※備考欄にはあなたの地域の呼称を記入してください

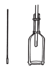
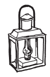
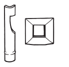
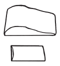
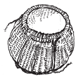
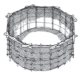
名称	説明	只見	奥三面	羽村	沼津	徳山	滋賀	鹿児島	沖縄	さまざまな呼称	備考
とあみ 投網	かぶせて捕る網漁具の一種。円錐形にまとめられた網地の頂点（ここに龍頭などと呼ばれる部品がつくことがある）を支点にして、網裾を水面に大きく円形に広げるように投げて魚群にかぶせる。網裾には錘りがつき、内向きに袋状の部分があって、包囲された魚類がその中に入って捕えられる。陸上、あるいは浅瀬に立つか、船上から用いる。	トアミ	アミ		トアミ、ナゲアミ	トアミ	トアミ、ウチアミ	トアミ、ナゲアミ	チチョウ網		
よつであみ 四手網	網漁具の一種で、十字形に大きくひろげた弾力のある四本の「手」の先端に、四角い網地の四隅を縛りつける。十字の柄の支点を上方に吊り上げて、網地の上に入った獲物をすくいあげる。支点部分は単に縛るだけでなく、「くもで」などと呼ばれる十字形のジョイントが用いられることがある。	ヨツデアミ			ヨツデ、マチアミ		ヨツデアミ	ヨツデアミ		【四手網】あほーまち・かきあみ・くもで・けーさんで・さで・さな・もっぱ・じゅぶ・よつもち　以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）	
おもり 錘	漁撈用の錘。釣り用と網用がある。釣り用のおもりは鉛や石で作られる小ぶりのものが多い。網用は沈子と表示されてイワと呼ばれる石製・鉛製・素焼きの土製品などがある。				ヤ、イヤ、ヤイシ、ヤキヤ（網用）	オモリ	シズ、イワ	ユワ（イワ）	ンブシ	【錘】つつろ・びーし・びし　【釣のおもり】しず・しずみ・どんぐり・どんぶち　以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）	
 いわ 沈子	漁網の錘をとくにイワ（沈子）という。貝殻や石を縄で縛ったり、小石を藁で包んで縛ったものなどがあった。土器の素焼き製品（紡錘形や円筒形など）も古くから用いられ、釉薬がかかったものも広く使われている。イワを付ける綱をイワヅナ（ヤヅナなど）といい、現代では線状の鉛を綯い込んだ縄も用いられている。				ヤ、イヤ、ヤキヤ、クルミイヤ（網用）		シズ、イワ	ユワ（イワ）		【網のおもり】いや・いわ・や・やかた・ゆわ　以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）	
 うき 浮子	漁撈用の浮き。釣り用と網用がある。釣り用には、風船浮きなど多様なものがあり、網用は浮子と書いてアバと呼ばれる。古くは板製のものや、樽（浮樽）やガラス製（ビンダマ）や樹脂製の浮きがある。	×			ウケ、アバ、アンバ、カンタ（浮樽）		アバ	ウキ	ウキ	【浮子】あば・あばき・うかし・うけ・おーぞく　以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）	
うきだる 浮樽	漁撈用の浮きとして用いられる樽。釣漁具に伴う小型のものは釣糸を巻きつける機能があり、網漁具用には巨大なものがある。漁網を支える浮力を確保し水圧に耐えるように内部に支柱が仕込まれていたり、網の守護のための恵比寿像などが入っている場合がある。				ウケダル、カンタ、オオガンタ			ウッダイ			
がらすうき 硝子浮子	漁業用のガラス製浮子。縄で網目状に包んで用いる。水を吸わず浮力が大きい長所と、割れやすい短所があったが、近年は樹脂製の球体に代わり形態も楕円型などもできて多用されている。				ビンダマ						
釣漁具											
つりばり 釣針	魚など水中の獲物を釣るのに用いる先の曲がった針。釣針・釣鈎・釣鉤などとも書く。獲物や餌が取れにくいように先端にカエシ（これにもエギなど方言がある）がつく場合がある。獲物を誘致するために餌や擬餌を付けたり、餌袋や錘や複数の針をつけるために天秤などを伴うものもあり、これらの釣り仕掛けを総称して釣鈎としてもよい。				ツリ、ハリ	ツリバリ	ツリバリ	カギ、ツイバイ、ハイ	ハーイ	【釣針】がーし・がんぎばり・じー・つり　以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）	
つりざお 釣竿	魚などを釣るために用いられる竿。獲物により長さや太さなど各種あり。竹材など材料を吟味し、火であぶって曲がりをとり、手元は滑り止めの縄などを巻いたり、先端部分に釣糸をつけたりする仕様を持つ。				ハネ、サオ		ツリザオ	ツイザオ	ソー	【釣竿】きしばく・ござお・さおずり・つべ・なぎだお・はじき・はね・はんじき・まー・つぃんぶく・やぎだけ　以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）	
つりいと 釣糸	魚釣りに用いる糸。マグロ・カツオなど大型魚には太い麻糸や木綿糸が用いられ、テグスやナイロン・鉄の針金・ワイヤーなど材質はさまざま。軸になる糸にコイル状に細糸を巻いたもの（せぎ糸）もある。				ツリイト、ヒヨ（延縄の枝縄）	テグス、ホンスジ		ヨマ		【釣糸】ぐ・すが・ずの・つりよま・なー・やま・やめ・よま　以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）	
 はえなわ 延縄	釣漁具の一種で、一本の長い幹縄に、多数の枝縄を垂らし、その先に釣鉤と餌をつけて漁獲を図る。マグロ縄、カジキ縄、タラ縄などあり、長大なものは数キロに及ぶ。部分名としての幹縄や枝縄・浮標などにもそれぞれ方言がある。				ハエナワ、マグロナワ、ミチナ（幹縄）、ヒヨ（枝縄）、セギビヨ（マグロ縄の枝縄）			ハエナワ			
はえなわいれ 延縄入れ	延縄漁に用いる縄類を一単位ずつまとめて入れる容器は、投縄時にからまないよう引き出せるように、縁に釣鉤をかけられる仕掛けが付くことが多い。延縄籠・延縄鉢・延縄箱などの形式があるので「延縄入れ」を総称とした。縄は順次繋いで投縄する。				ナワカゴ		ハリカゴ、ナガシバリ	（ハエナワノ）ワク	ウミバーキ	【延縄入れ】ナワカゴ・ナワバチ・ナワバコ　以上、神野善治	
 ぼんでん	延縄（はえなわ）漁において、長大な幹縄を引き揚げるときの目印とするために、縄の始めと終わりに海上に浮かせる小旗のついた竿。浮きと錘をセットで用いる。梵天と漢字を当てたり、モンゼンバタなどとも呼ばれる。				ボンデン						
ぎじばり 擬餌鈎	魚釣の餌となる小魚、海老、虫などの姿や色に似せたもの。対象となる魚や烏賊などにより、鹿角やカジキのあご骨、金属やプラスチック、色糸や羽根毛、フグやカワハギなどの魚皮など多様な素材で多様なものが工夫されている。釣鈎に羽根毛を巻いた擬餌は毛鈎（けばり）と呼ばれ、大型のアオリイカなどには海老や魚の形をした木彫の擬餌に鈎を付けたものが用いられエギ（餌木）などとも呼ばれる。				バケ、ツノ			イカエギ、イカエド、ソーラエギ、ヒコーキ		【擬餌鈎（ぎじこう）】おどらかし・かっそー・かの・かんな・ひっかけ・ほろ　【船のまわりに針金を仕掛けたいか釣用の漁具】すまる　以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）	

名称	説明	只見	奥三面	羽村	沼津	徳山	滋賀	鹿児島	沖縄	さまざまな呼称	備考
いかつりぐ 烏賊釣具	竿と一体の仕掛け。古くは鹿角などに鉤を付けた擬餌の烏賊角（いかづの）が用いられ、手釣りのものから、長く多数のツノを連結式にしたものなど多様。アオリイカ用の擬餌は古くは木彫で海老形などを模し、餌木（えぎ）などと呼ばれる。	ー					×	イカガノ、イカガナ	イカイユ		
いかづの 烏賊角	烏賊釣り用の擬餌鉤。四方に突き出す鉤状の針を先端に付けて、軸になる針金に色糸を巻きつけたりする。				イカヅノ、サッポロ、テーラ、カケド		×	イカガノ、イカガナ、トンギョガナ		【烏賊角】サッポロ・テーラ・カケド　以上、神野善治	
 えぎ 餌木	アオリイカ用の擬餌鉤。餌になる海老や小魚のを模して古くは木彫で作られ、模様や彩色され、ヒゲなども付ける。尻尾に鉤を付けて、寄ってきたアオリイカに引っ掛けて釣る。						×	イカエギ、イカエド			
 かつおづの 鰹角	カツオ釣り用の擬餌鉤。鹿角などを軸に魚皮、羽根毛などを付けて餌に似せたものが古い。このためツノの呼称がある。				カツーヅノ		×	ツノ			
てんびん 天秤	魚釣り具の一種。複数釣糸を水中で吊り下げる部品。餌袋や錘りなどが付く場合もある。両側に吊り下げるので「天秤」の名があるほか、ビシなどとも呼ばれる。				テンビン		×	テンビン			
つりいとまき 釣糸巻き	魚釣り用の釣糸巻きあるいは網糸用の糸巻き。木製の竹製などの枠状や筒状など各種がある。				イトマキ			ワク			
 せんこうばん 潜行板	釣漁具の部品。動力船による引き釣り漁法に用いられる釣糸の途中に取り付けて道具が沈みこむようにする舟形の板状の部品。				センコウバン			ヒコーキ			
突漁具・その他の補助具											
てかぎ 手鉤	棒の先に丈夫な鉄鉤を付けた漁撈用具で、大型のマグロ・カジキなどの獲物を船上や岸から手元に引き寄せる。	マスカギ、ヒキカギ、オキカギ	マスカギ、テンカラカギ		シビカギ、ブリカギ	（テカギ）		フカカケ、フカカギ	カキジャー	【手鉤】シビカギ、ブリカギ　以上、神野善治	
めずり	マグロなどの大型魚などを船上に引き上げるときの手鉤の一種。太い鉄棒をまげ、先端を尖らせ、反対の端は、ロープを縛れるよう環にしている。				メヅリ						
うおかぎ 魚鉤	長い棒の先に鉄製などの大きな鉤をつけた漁具。岸から川底に延ばしたり、潜水をしたり、あるいは船上からサケ・マスなどの大型の獲物を引っ掛けて捕る。2〜4本の鉤が付くものもある。				カギ						
 たこひき 蛸曳き	蛸釣り用の仕掛け。2、3本の鉤を付けた長方形の板に、餌を縛り、蛸を誘い出して、釣り上げる。板に石などの錘、引き縄などが付く。				タコツリ、タコヒキ		×	タコガノ、タコガナ		【蛸曳き】タコツリ・タコヒキ　以上、神野善治	
やす 籍	猎とも書く。魚など水中の獲物を突いてとらえる漁具。長い棒の先に金属製の鋭い金具を付ける。投げずに手で持って突く漁具を「やす」と呼び、投げたり、砲などで撃ち出したり、水中でゴムなどで打ちだして獲物を突きさして捕えるものを「もり（銛）」と呼んで区別することにする。	マスツキヤス、ヤス	カサヤス、ホリマスヤス、イワナヤス		フシ、イッポンゾウ	ヤス	ヤス	カナツキ、ガンツキ、ホコ	トゥジャ	【籍】いーぐん・いぐむ・いぐん・いとぎ・かなぎ・がなずき・かなつき・くし・どぅー・ひし・へし・やはす・ゆくん・ゆすり・んぎゅん・んぐん　以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一）【魚をついて捕る漁具・やす】いさり・ひし・ふし　以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）	
もり 銛	長い棒の先に金属製の鋭い金具を付けて魚など水中の獲物を突いてとらえる漁具の一種で、船上から投げたり、砲などで撃ち出し、水中でゴムなどで打ちだして獲物を突きさして捕えるものを「もり（銛）」と呼ぶことにし、投げずに突いて捕る道具を「やす（籍・猎）」と呼ぶことにする。	ヤス			サンボンモリ、カジキツキ、モリサキ		ナゲヤス	オーヅキ、ソーラトギ		【もり】いぐむ・どちつき・とぅな・ひのし　以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）	
りとうもり 離頭銛	カジキマグロ、サワラなどの比較的大きな魚を突くのに用いる銛で、獲物に刺さると銛先が竿から離れる。銛先に縄が付き、銛から離れて、獲物が弱るまで追尾したあと引き寄せることができる。銛先は3本など複数の場合が多く、銛と銛先がセットになり、縄を容れる専用の桶などもある。				モリサキ			トギャモリ			
うおたたき 魚叩き	マグロ、サケなど比較的大型の魚類をとりあげたとき急所を叩いて殺す棒。瞬間的に殺すことで鮮度を保つ。棒状のものと、横杵状のものもある。道具の一部に削り掛けを作るとか、叩く時に唱え言をするなど呪術的要素が加味される場合がある。				タタキボウ					【魚叩き棒】ナヅチ・エビスヅチ　以上、神野善治	
陥穽漁具・干潟漁具・海苔養殖用具											
 うけ 筌	水中に据えて、魚や蝦蟹などを捕獲する漁具の一種。餌や囮などで誘ったり、隠れ家にみせたりして、一度入るとカエシや水圧などで出られなくして生け捕りにする。竹などで編んだ籠状のものが多いが、筒形、箱形、球形など形態や寸法は様々で、ガラスや樹脂製など素材も多様である。	ムジリ、ドウ、タツベイ、ウツボ	ドォ	ドウ	モジリ、カニモジリ、ウナギモジリ、ドジョウモジリ、カニカゴ、ハズカゴ	モジ、クダリモジ、ノボリモジ、ゴロモジ（小型）	ウエ、モジ、モンドリ、ノゾ	ウケ、ガネテゴ、ウナッテゴ、キダカカゴ	アニク、チズカ	【筌（うえ）】うけ・うざ・うろ・さで・じんどー・ずー・ずーけ・たつめ・つず・どー・どかご・もじ・どーけ・もんどり　以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）【筌（うけ）】ド・ドウ・モジ・モンドリ・ウエ・ウナギカゴ・ドジョウド　以上、神野善治	
 がらすうけ ガラス筌	漁具の筌の一種でガラス製。徳利型・筒形などがあり、入口にカエシがつく。コヌカなどの餌を入れ、片方の口をふさいで沈め小魚などが入る。子供の遊びにも使用。大正時代にガラス生産の発達とともに全国で大量に生産された。今では樹脂製のものもある。				ガラスウケ、ハヤビン、ハヤトリビン		ビンヅケ、ツケビン	ビンヅケ	×	【雑魚などをとるガラス製の道具】ぎやまん　以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）	

名称	説明	只見	奥三面	羽村	沼津	徳山	滋賀	鹿児島	沖縄	さまざまな呼称	備考
たつべ	琵琶湖に特徴的な筌の一種で、直径20 cm程、高さ15 cm程の円筒形の籠の上面から獲物が入る構造を持つ。延縄式に連ねて仕掛ける。諏訪湖にも類例がある。						エビタツベ	ヒビ			
うなぎづつ 鰻筒	ウナギやアナゴなどの水中の獲物をとらえる筒状の漁具。単に筒状でカエシの無いものもある。				アナゴモジリ、アナゴパイプ		ウナギツツ	タカヅッ、ポップ			
ふしづけ 羅	笹束や青い葉がついた枝（柴）の類を束ねて沈めて魚類の棲家や産卵場所を提供して、網や籠で捕獲する漁法であるが、主体が木の枝など素材そのものなので、道具として特定しにくい。網籠や筌などと併用されることもある。				シバ、シバツケ、ササモジリ		ツケシバ	エッドコ、イカシバ	×		
うおふせかご 魚伏籠	沼地や溜池・水田などで魚を捕える漁具の一種。底のない籠状の道具で獲物を水上から突きかぶせて、口から手を入れて獲物をつかみ捕る。				（ツキウゲ）		オオギ、フセカゴ			【魚伏籠】カブセカゴ　以上、神野善治	
うなぎかき 鰻搔	水底の泥中にいる鰻などを掻きだす漁具。長柄の先に弓なりに曲がった刃先に鈎があり、獲物を掻きだす。干潟でも同様の漁具が用いられる。				（うなぎかき）		ウナギツカミ	ウナッカッ			
がたいた 潟板	干潟漁のために潮の引いた潟上を滑って移動する細長い板状の乗り物。先端がやや反り上がる。板上に片膝をつき、獲物を入れる桶を乗せて手をそえて、もう一方の足で潟土を蹴って板を滑らせながら進む。有明海沿岸のほか、韓国の干潟地帯などでも用いられている。						×			【潟板】オシイタ・ガタスキー　以上、神野善治	
ぶったい	水中の小魚や蝦などをすくう漁具の一種。簀の子状に平らに編んだものの両端のヒゴを持って逆「ハ」の字に立ち上げ、手元側はヒゴを交互に重ね合わせ、竹棒を添えて固定し、もう一方は開口部とする。				（ブッタイ、ブッテ）		×			【魚をすくい取る竹製の具】ぶったい・ぶってー・じょーれん　以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）	
じょれん 鋤簾	一般には水中の土砂を掻き取る道具であるが、漁具の一種としても貝類などを掻き捕る漁具として用いられる。長い柄の先に竹箕状のものを付けたり、歯を並べた鉄板に金網を取りつけて、土砂の中に棲む貝類などを浅海に入って、あるいは船上から引き掻いて捕える。				ジョレン		マエガキ、カキ	ケカキ			
のりわく 海苔枠	海苔を漉くための型枠。海苔簀の上に乗せ、一定量の細かく刻んだ海苔を注ぎ入れて枠の中に広げる。水を切ると枠をはずして海苔簀のまま乾燥させる。枠の大きさで海苔の規格がきまる。				ワク、ノリワク		×				
 のりす 海苔簀	葦などを素材に編んだ小さな簾で、海苔枠とともに海苔漉きに用いる。				ノリス		×		×		
のりげた 海苔下駄	海苔養殖のために海中で作業するときに履いた高下駄。高いものは3 mもあり、浮かないように石を縛りつけて履いた。						×				
ふりぼう 振り棒	天然の海苔をつけるためのソダを浅瀬に突き挿す穴を砂にあける道具。柄を握り、途中に足をあてて体重をかけつつ、砂をこじりながら穴をあけて、そこにヒビを挿し立てる。				（ブリ）		×				
あみひび 網ひび	海苔養殖の道具のひとつ。海面すれすれに張って、海苔の胞子をつけて海苔を繁殖させる網。						×				
 のりきりぼうちょう 海苔切り包丁	摘み取った海苔を細かく刻むための包丁で、数枚の刃をひとつにまとめたものは飛行機包丁などとも呼ばれる。また、この種の包丁を付けて動力化した苔切り機も作られている。						×				
潜水漁具											
 いそがね 磯金	潜水漁で用いられる魚介を岩からはがしとるための金具。海女による潜水漁で、アワビなどの貝類やウニ・タコなどの捕採に用いる鉄製のへらまたはカギをいう。	×			イソノミ、アワビオコシ		×	アサリグイ、イソグジイ		【長柄の鮑取り用具】けんざわ　【のりなどを掻き取る円形の道具】かい　以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）【磯金】アワビオコシ・アワビガネ・カイオコシ・ノミ・クギ・カツカネ・イソガネ・ナサシ・シーズガネなどの呼称があり、小型のものはコノミ・コガネなどと呼ばれる。以上、神野善治	
すかり	潜水漁などで捕獲した獲物を入れる網袋。浮き樽などに吊り下げて用いるものがある。	×			スカリ			ククリ			
ふたつめがね 二つ眼鏡	潜水漁に用いる水中眼鏡の一種。両目に別々にあてる形式。ガラスの普及とともに沖縄糸満で明治時代に追込網のために作られた木製のミーカガンは、その漁法とともに海外にまでもたらされ、その意匠は今日の水泳用眼鏡にも共通する。				メガネ、フタツメガネ			スイチューメガネ、イショメガネ、フタツメガネ	ミーカガン		
 ひとつめがね 一つ眼鏡	潜水漁に用いる水中眼鏡の一種。両目をともにあてる形式。顔に当たる部分が金属製、ゴム製のものなどがある。水圧調整のために空気袋が付く場合もある。				メガネ、ヒトツメガネ		スイチュウメガネ	ヒトツメガネ			

名称	説明	只見	奥三面	羽村	沼津	徳山	滋賀	鹿児島	沖縄	さまざまな呼称	備考
はこめがね 箱眼鏡	磯漁で船上から水中を覗き見るときに用いる眼鏡。箱型と円筒型の桶型とがあるが、ともに箱眼鏡としてまとめておく。いずれも明治以降、板ガラスが普及してから開発された道具で、顔を充てる部分の形などに地域色がある。	ガラスバコ、ハコメガネ	ハコガラス		メガネ、ハコメガネ、スイガン	ハコカガミ、ミズカガミ、ミズクグリ、ハコメガネ	ハコメガネ、ノゾキ、カガミ	ハコメガネ	タマウーキ		
 いそぎ 磯着	海女が潜水のときに着る作業衣。晒木綿で仕立てたもので、下半身はモモヒキのように長いものと、猿股のように短いものとがある。昭和初期までは上半身は裸で潜っていた地域が多かった。						×			【磯着】イソジュバン・イソシャツ・カツギジュバン　以上、神野善治	
こしまき 腰巻	海女が潜水のときに下半身につけた作業衣。その後、パンツ形式のものになり、昭和初期までは上半身は裸で潜っていた地域が多かった。				コシマキ		×			【腰巻】スミマキ・ナカネ・イソナカネ　以上、神野善治	
船上用具・操船用具											
 ろ 櫓	和船を漕ぐための推進具。艪とも書く。主要な２材（艪下と艪腕）から構成される。水中に入って水を切り、推進役を果たす艪下は、平たい棒状で、断面が平たい菱形に近い形で、両端が尖って水を切り、８の字に回しながら漕ぐことで、プロペラと同様の推進力を生じる。もう１材の艪腕は、艪下を「へ」の字に曲げた角度で、タガなどと称する麻紐（のちに鉄線など）で結合される。結合点近くに、入れ子と呼ばれる部材を取り付け、その凹部を、船梁の先に付けた艪臍に嵌めて、ここを支点として漕ぐ。艪腕には先端近くに艪づくという短い棒を差して、漕ぐときの握り手とし、艪を傾けるときに力を入れるとともに、この棒に綱（早緒）を付けて船体とつなぐ。				ロ		ロ、ロウ	ロ		【櫓】あきろ・あいろ・あばろ・うちろ・おーども・おもて・かい・かいろ・かけろ・ころ・しんぐ・すざく・ともど・とも・ともろ・はっさき・はどろ・ふるろ・まえどーろ・まえろ・りゅー・わきろ　以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一）	
かい 櫂	古来から用いられてきた船の推進具のひとつで、棒状で先端が平らに削られ、手元にT字型に短い握り手が付く。船縁に綱の輪を取り付け、その輪に櫂を差して、櫂を８の字に練ることで推進力が得られる。艪はこの櫂から変化し発達したものと考えられている。ただし、大型の艪船でも、櫂は複数併用され、磯漁などで小周りの効く操作には櫂が用いられてきた。ちなみに、ボートの推進具としてオールが知られている。先端が箆状の棒の途中を支点にして、漕ぎ手が後ろ向きに漕ぐ方式である。前者は櫂（英語ではpaddle）、後者はオール（oar）と呼び分けておこう。日本では櫂は縄文時代の丸木舟にも付随して出土している。	カイ			カイ、キャア	カイ	カイザオ	カイ、ヨホー	ウェーク	【櫂】うぇーく・おやこ・さっけ・へらかい・やく・やふ　以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）	
 ほ 帆	風力による船の推進具。古くは莚帆など。日本では江戸期に木綿布の帆が発達する。帆に付随する帆桁・滑車（カシラセビ）や縛り板（ウチマワシ）など、あるいは帆を収納する専用の櫃（ホビツ）などがある。				ホ		ホ	ホ	フー		
ほびつ 帆櫃	帆布を収納するために特化した桶や箱類、密着する被せ蓋がつく。				ホビツ						
いかり 碇	船や網などを海で一定の場所に保留したり、網を引いて移動させるための手掛かりとしたりするように、海底に固定する鈎型の道具。石や鉄棒などの重りがつく。海底の岩などにかかって引き揚げられなくなることがあるので、曳き綱の付け方に特別な工夫が凝らされていたりする。全体が鉄など金属でできたものは「錨」と書き分けることが多い。				イカラ		イカリ	ヤマタロウ	イカイ	【錨（いかり）】いから・かいて・かいで・かぎ・かたつめ・かなご・きっと・すばる・すばろ・すぼら・すまり・すまる・つぶら・つぶろ・びょー・まけ・やまたろー　以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【錨（いかり）】かぎ　【石で作った舟の重り】つぶら　【木に石をしばりつけた錨】きっと・ざまっか・まけ　以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）	
かじ 梶	船を進行させる用具のひとつで、進行方向を決めるために用いられる。板部分と軸部分からなり、日本の伝統的な船では、船を陸上にあげるときなどは取り外しができるのが特徴である。部品として梶束（カンヅカか）などがある。				カジ		カジ	カジ			
みずおけ 水桶	船上用具としては、海水をくみ上げるためのものは二つの耳の間に綱がつき、飲料水の専用の水桶は、竹筒の飲み口がついたり、スライド式の蓋がついたりするものがある。	ミズオケ			ミズオケ、カシオケ			ミッオケ			
 あかとり あか取り	船底に溜まる水をアカといい、これを掻きだすための道具。船底のカーブに合わせた形をしていることが多い。雨水がたまると船材を痛めるのでとくに丁寧に掻きだす。アカは仏教用語の「閼伽水」に通じるとされる。	×			アカトリ		アカトリ、ツキオケ、ゴイシャク	アカトリ、アカクミ	ユートゥイ、アカトゥイ	【船の溜り水を汲み出す用具】じゅず　以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇） 【あかとり】アカカイ・ユートゥイ　以上、神野善治	
とま 苫	船上の雨除け、日除けのシートに相当するもので、陸上の「蓑」の背と同様に茅などを数段に重ねて編む。				トバ			トマ		トバ	
こしみの 腰蓑	漁撈の活動において水しぶきや魚で腰が濡れないように巻く、藁や茅などで編んだもの。				コシミノ		コシミノ				
べんとういれ 弁当入れ	船上の食事のために持参する弁当用の桶や箱類。				チゲ、ウミハンダイ		タジ				

名称	説明	只見	奥三面	羽村	沼津	徳山	滋賀	鹿児島	沖縄	さまざまな呼称	備考
 つりぐばこ 釣具箱	沖箱・枕箱・ちげ（鈎笥）・枕箱などとも呼ばれ、船上で釣鉤や釣糸、テグス、錘、よりもどしなどの釣りの小道具を入れて置く容器で、箱型、桶型などがある。細かい部品を仕分けられる中蓋があり、仕切りが設けられているものが見られる。個人持ちで氏名が墨書されている場合が多い。蓋はかぶせ蓋が多く、縄で縛ると密閉されて、遭難時も浮いて救命具としての役割を果たしたり、乗組員の安否を知らせる手掛かりになった。日ごろは枕の代わりにすることもあって、マクラバコなどとも呼ばれた。中には守護神仏のお札などを貼り込んだり、場合によってはヌード写真などをひそませている漁師も見受けられた。	×			オビツ、チゲ		フナバコ	イソバコ、カラト、トンコツ、オキテゴ	ウミバク	【舟の道具箱】まくらばこ・まんのばこ　以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）	
 まくらばこ 枕箱	船上で仮眠をするときの枕で、蓋や引き出しがあり、中に煙草などを入れられるようになっている。				タバコイレ			タバコ、トンコツ			
 かぐらさん 神楽桟	漁船や地引網などを浜に引き上げるときの縄を人力で巻き取る木枠とろくろなどと呼ばれる巻き取り部からなる道具。				カグラサン		ロクロ	カグラ	×		
 かっしゃ 滑車	ロープを通して、品物を引き揚げたり、移動の向きを変えたりする道具。漁撈用具や船上の用具として滑車が多用されている。セビ系統の呼称があるのは帆柱に「蟬」が止まっているような姿からきているという意見がある。				セミ、セビ		カッシャ、セミ、セビ	セミ			
すばる	海に落としてしまった釣具などを回収するための鈎をいう。竹の枝の付け根部分だけを束ね、中に錘りになる石などを入れて紡錘状にしたものが多い。同じ目的のために全体を鉄で作った小型の錨状のものも同じ名前で呼ばれることがある。すばるとは「統る」つまりまとめる意味があるといい、星のスバルも小さい星がまとまっているという同じ意味からついた名であるとされる。	サンタロウ			スバル		ガンガリ	ヤマタロウ、スバル			
 しゅうぎょとう 集魚灯	夜間の漁業において、海中を照らして明かりで魚介を集めるための装置。				シュウギョトウ、センギョトウ			カガイ	ランプ、テーランプ		
みずあげかご 水揚げ籠	漁獲した獲物を魚市場などに水揚げするときに用いる専用の容器。水切りと計量の機能を伴うことがある。				カシアゲカゴ						
けんちます 検地枡	漁獲した小魚などの量を計るため桶状の容器で、水切りのためのスリットが側面や底面に設けられている。岐阜県など特定の生産地がある。				ケンチマス		ウリマス、カイマス		キンバーキ		
さおばかり 竿秤	重さを量る棒状の道具で、一端に計量対象を吊り下げるための鈎と、吊り手がつき、分銅の吊り下げ位置に目盛がつく。				ハカリ、ボウバカリ		チギ、ハカリ、カンカ				
 びく 魚籠	捕獲した魚介をまず確保しておくために腰につけておく小型の籠類で、入れやすいように口がひろく、逃げ出さないように括れがあり、腰にしばる紐がつくものが多い。	ハケゴ	ハケゴ		ビク	コシヅケ、イオトリカゴ、ノワイカゴ、ノッペ、ヨゴ	ビク	カタギリテゴ、イオテゴ	ウミ、ディール	【釣った魚を入れるための腰に付ける小さな竹籠】えふご　【釣った魚などを入れる竹籠】きゅーたえ・きゅーて・きゅーてー・きゅーてやえ・ちゅーて・ちゅーてー・ちゅーてやえ・ゆーたい　以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一）	
 おきぎもの 沖着物	漁撈活動に用いた船上の着物で、主に寒い時期の厚手の防寒用着物をいう。端布を重ねて刺子にしたものなどが典型的なもので、ドンザ・ドンジャなどの名称がある。	×			ドンザ、ウミボッコ		ドンザ	シオハレ、ドンザ	フクター	【漁師が着る木綿刺子の上着】どさ　以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一）【沖着物】いそ・おきあわせ・おきぞんざ・おわんだきもん　以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）	
たいりょうばた 大漁旗	漁船が大漁をして帰港するときにマストに掲げる祝いの旗で、めでたい文字や恵比須などの神像や鯛や旭日など宝尽くしの派手な模様とともに船名が色鮮やかに染められ描かれているものが多い。新造船の祝いに関係者から贈られる。横長の長方形のものは、フライキなどの外来語系の呼称が多いが、古い形式では縦長の幟旗に船名や家印などが染め出されている。				タイリョウバタ、フライキ						
たいりょういわいぎ 大漁祝い着	大漁を祝って船主や網元から支給される祝い着物。大漁祝いを万祝いなどといい、その着物も同様に呼ばれた。目出度い模様を染めた祝い着物を染める染物屋が下総地方にあって、その製品が広く行き渡った。				マイワイ、マンイワイ						
 ふなだまさん 船霊様	和船の守護神と考えられている精霊。具体的な形がなくても、信じられている場合もあるが、帆柱を立てるための筒柱に小さな四角い穴を彫り込み、その中にご神体などと称する紙人形、銭、サイコロ、髪の毛、五穀などを封じ込めたものが各地にあり、鋼鉄の船でもこの部分だけを作って祀ったり、廃船後、筒柱の部分を切り取って家に祀る地方もある。また、近代の漁船などでは操舵室などに神棚を設けて祀る場合もある。				フナガミサン、フナダミサン			フナダマ			
 ふなじしゃく 船磁石	和船時代の木製容器のコンパス。方向を示すのに干支で（つまり子丑寅…と）漢字記される。船に固定して用いる場合、裏針などと称して、方角を示す文字を逆回転に記して船の進行方向を示す工夫が見られるものもある。				フナジシャク						

名称	説明	只見	奥三面	羽村	沼津	徳山	滋賀	鹿児島	沖縄	さまざまな呼称	備考
みずだる 水樽	船上で飲料水を確保しておくための比較的大型の木製容器。帰港したとき、あるいは出先でも水場がある磯へ船をつけて確保した。				ミズダル			ミッダイ			
 かいべら	カツオ釣りのときに水面を叩いて、水面に餌鰯の群れがいるように偽装して鰹の群れを集めるための用具。今日では散水装置がこれにかわっている。				ササカイ		×				
もかりがま 藻刈り鎌	水中の水草、海藻を刈り取るための柄の長い鎌。モキリガマともいう。						モカキ、モトリ			【藻刈り鎌】モキリガマ　以上、神野善治	
 ランタン	灯火の一種。漁撈用具としては船上で集魚灯などとして用いられる。角形でガラス張の火袋に石油で明かりを灯すものがこの名で呼ばれている。						カンテラ	フナランプ			
漁具製作用具											
つむ 紡錘	漁撈用の釣糸・網糸を紡ぐときに用いられたものが漁村部に残されている。長い鉄軸に木製などの円盤あるいは円錐状の錘が付き、鉄軸の先端は鈎状になっている。麻糸などを績んだ（繋ぎあわせた）苧（お）＝績み苧をこの鈎にかけて手で回転させて撚りをかける。				ツモ		コマ、ヨリモドシク				
あばり 網針	漁網を編むときの編み針。多くは竹製で平たく細長く先端が尖り、中針が刳りぬかれ、末端を刳り込んで2本の短い足がある形が一般的。中針と末端に網糸を巻き取って糸巻きの役目を果たすと同時に、編み針として結び目を締める編み針としても機能する。網目の寸法を決める網すき桁、目板と併用することが多い。屋号や家印などが付くことが多い。出土品には骨角製もある。	アバリ、アミスキバリ			アンバリ	アミスキバリ	スキバリ、アシバリ	アミバリ	アグイ	【網をあむ道具】あぐり・おばり・けた　以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）	
 あみすきけた 網すき桁	漁網などの網地を編むときに網目の寸法を決めるスケールの総称。このうち、断面が紡錘形をした板状の小型のものを目板と呼ぶ。これらに網糸を一回巻いて端で網目を結び、一列結び終えてから、ひとつ下段にあてて編み続ける。巻き付けた糸の長さが、網の結び目から結び目の寸法（網目の半分）に相当する。網目の寸法に応じて、それぞれの網すき桁・目板が用意される。素材は竹が多いが、比較的大きな網目には樫製の木枠型のものを、曳網類の大手網などの藻網用には割竹製などの大型のものもある。何尺もある大きな網目を編むための細長い桁状のものもある。総称して網すき桁と呼ぶことにする。				ケタ					【網すき桁】ケタ・メイタ　以上、神野善治	
 めいた 目板	漁網などの網地を編むときに網目の寸法を決める網すき桁のうち、比較的小さな網目を作るためのものを特に目板という。主に竹製で、断面が紡錘形。網糸を一回巻いて端で網目を結び、一列結び終えてから、ひとつ下段にあてて編み続ける。巻き付けた糸の長さが、網の結び目から結び目の寸法（網目の半分）に相当する。網目の寸法にあわせて各種の寸法の目板が用意されている。				ケタ		メイタ、ヘラ、ジョウギ	イオゴ、メイタ	アギタ	【目板】メイタ・ケタ　以上、神野善治	
いけす 生簀	捕獲した魚介を一時的に生かしておくために水面近くに浮かしたり、水中に沈めておく容器類。新鮮な水が出入りして獲物を活かし続けられるような工夫がある。生簀籠、生簀網、生簀箱など素材や形状にはいろいろある。	×	イケスバコ		イケス、イキョウ	イケタゴ	イケス、イケンス	イケスブネ、イケスバコ、イケス		【魚などを生かしておくための大きな竹籠】いきお・いきょー・いきょーかご・いっきょーかご　以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一）	
 いけすかご 生簀籠	捕獲した魚介を生かしておく竹籠類で、カツオ漁の活餌にする生き鰯を入れるものなどには、直径、あるいは一辺が2m以上あるような巨大なものがある。				イキョウ		ドンベ、ドウビン	イケスカゴ			
 いけすあみ 生簀網	捕獲した魚介を生かしておくために水面に浮かせたり、沈めておく袋状の網。角材の浮き木を六角形や八角形などに組んだ巨大な生簀網などがある。				イケスアミ		タンク、イケアミ、カケタマ				